

## 食行動からみた養育条件と発達に関する研究 (分担研究：小児の発育発達に及ぼす地域・家庭の影響に関する研究)

八倉巻和子\* 大場幸夫\* 村田輝子\* 森岡加代\*  
大森世都子\*\* 水野清子\*\*\* 高石昌弘\*\*\*\*

要約：平成元年度は、母親から訴えのあった食行動を性別・年齢別に検討し、さらに母親の養育態度との関係について考究した。性別に訴えのあった項目をみると、男児では「食事の偏り」「食事のしつけ」に関する項目であり、女児では「食事の量」に関する項目であった。年齢別では、年少児は「咀嚼」「食事の状態」であり、年長児は「食事の偏り」「食事のしつけ」の訴えが多く、母親が訴えた食行動に性別・年齢別の相違がみられた。食行動と養育態度との関係についてみると、「咀嚼・食事のしつけ」に関わる項目では養育点数の低い母親に「食事量・食事の偏り」に関わる項目では養育点数の高い母親に関係がみられた。子どもの食行動の発達については、子どもの成長・発達段階を考慮した母親の対応が必要とされる。今後、個別に追跡し、それらを明らかにしたいと考えている。

見出し語：乳幼児，食行動，養育条件

目的：本研究は、乳幼児の食行動を成長・発達の面から追跡し、さらに母親の養育態度との関係について検討して、家庭における食教育や母子保健指導に役立てることを目的とした。

乳幼児の食行動と母親の養育態度との関係については、すでに多くの指摘がなされている<sup>1)2)3)</sup>。しかし、偏った食行動が乳幼児の発達に影響を及ぼすことを裏づける資料は少ない。

乳幼児の食行動の問題がいずれの時期に起こり、子どもの発達にどのような影響を与えるのか、さらに母子関係について、考察することが必要と考えられる。

本年度は、母親から訴えのあった食行動を性別・年齢別に検討し、さらに母親の養育態度との関係について考究することにした。

### 調査対象および方法

(1) 調査対象：対象は表1に示すとおり、秋田・千葉・東京・富山および岡山県の保育所に通園する1歳から6歳までの幼児とその母親の2,019名である。

表1 調査対象 (人数)

年齢(歳)	男	女	合計
1	34	45	79
2	72	66	138
3	149	136	285
4	273	284	557
5	309	288	597
6	176	187	363
合計	1,013	1,006	2,019

\* 大妻女子大学家政学部 (Faculty of Home Economics, Otsuma Women's Univ.)

\*\* 国立公衆衛生院母子保健学部 (Dept. of Maternal and Child Health, The Institute of Public Health)

\*\*\* 日本総合愛育研究所 (Nippon Aikyu Research Institute for Maternal Children Health & Welfare)

\*\*\*\* 国立公衆衛生院 (The Institute of Public Health)

(2) 調査時期：時期は昭和61年10月下旬から11月上旬に実施した。

(3) 調査方法：方法は所定の調査票を作成し、保育所を通して母親に配布、留置記入後回収した。

(4) 調査項目

・子どもの食行動に関する項目…幼児の食行動16項目について、母親の訴えの有無を設問した。

・母親の養育態度に関する項目…「子どもへの対応」「しつけ」「母子の生活環境」等の10項目を設問した。

結果：幼児の食行動16項目について、母親から訴えのあったものを以下の6つに区分し検討する。

- ① 咀嚼（噛めない、飲み込めない）
- ② 食事の偏り（偏食、食欲がない、菓子ばかり食べる、買い食い）
- ③ 食べ方（早い、遅い）
- ④ 食事量（過食、少食）
- ⑤ 食事の状態（遊び食べ、食事中さわぐ）
- ⑥ 食事のしつけ（はしが使えない、姿勢が悪い、ちらかし食べる）

1. 性別訴えのあった食行動

訴えのあった食行動を性別にみると図1に示すとおりである。

性差のみられる食行動は、16項目中8項目である。男児が有意に高い項目は、「食べ方が早い」「遊び食べ」「食事中さわぐ」「姿勢が悪い」「ちらかし食べる」、および「はしが使えない」である。女児が高い項目は、「食べ方が遅い」と「食欲がない」である。

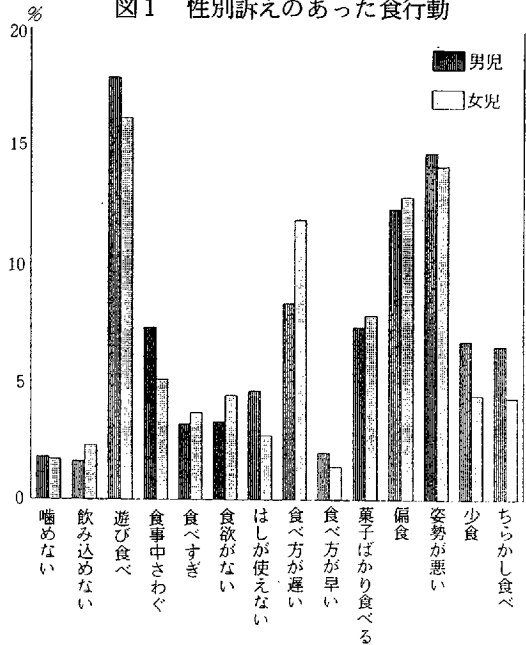
母親は、男児では主に「食事の状態」や「食事のしつけ」、女児では主に「食事量」について訴えている。

2. 年齢別訴えのあった食行動

訴えのあった食行動を年齢別に検討した結果を表2と図2に示した。

- ① 「咀嚼」に関する食行動の訴えは、2歳が最も高く、年齢とともに減少している。
- ② 「食事の偏り」に関する食行動の訴えは、5歳まで増加するが、6歳では減少している。

図1 性別訴えのあった食行動



- ③ 「食べ方」に関する行動の訴えは、年齢とともに増加している。
- ④ 「食事量」の項目についての訴えは、「少食」の場合、年齢が進むにしたがって増加する傾向を示している。
- ⑤ 「遊び食べ」「食事中さわぐ」など「食事の状態」についての訴えは、年齢とともに顕著に減少している。
- ⑥ 「食事のしつけ」についての訴えは、1歳・2歳・3歳と減少するが、5歳・6歳で再び増加している。

年齢別にみると「飲み込めない」「菓子ばかり食べる」「偏食」「食べ方が遅い」「少食」「遊び食べ」「はしが使えない」「姿勢が悪い」および「ちらかし食べる」の9項目については、有意差が認められた。

以上、母親が子どもの食行動について困っていると訴えのあった項目は、年少児では「咀嚼」と「食事の状態」であり、年長児では「食事の量」と「食事の偏り」「食事のしつけ」である。

3. 訴えのあった食行動の数

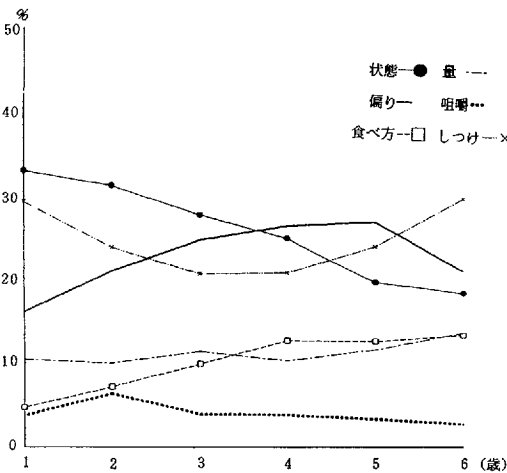
訴えのあった食行動の数は表3に示したとおりである。

平均訴え数は、1歳と2歳がそれぞれ1.9、

表2 年齢別訴えのあった食行動

区分	年 齢 項 目	1 歳		2 歳		3 歳		4 歳		5 歳		6 歳	
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
咀嚼	噛めない	3	2.8	5	2.0	9	1.7	14	1.6	17	1.7	9	1.7
	飲み込めない	1	0.9	11	4.4	12	2.2	19	2.2	16	1.6	5	1.0
食事の偏り	偏食	8	7.6	23	9.3	56	0.5	122	13.9	150	14.6	61	11.8
	食欲がない	2	1.9	9	3.6	22	4.1	33	3.7	46	4.5	15	2.9
	菓子ばかり食べる	7	6.6	20	8.1	52	9.7	68	7.7	76	7.4	28	5.4
	買い食い	0	0	1	0.4	2	0.4	10	1.1	3	0.3	4	0.8
食べ方	早い	4	3.8	3	1.2	7	1.3	9	1.0	18	1.8	15	2.9
	遅い	1	0.9	15	6.0	46	8.6	103	11.7	111	10.8	54	10.4
食事量	過食	9	8.5	13	5.2	15	2.8	29	3.3	27	2.6	22	4.2
	少食	2	1.9	12	4.8	46	8.6	62	7.0	95	9.2	49	9.4
食事の状態	遊び食べ	28	26.4	60	24.3	112	21.0	167	19.0	143	13.9	58	11.2
	食事中さわぐ	7	6.6	17	6.9	36	6.7	52	5.9	59	5.7	37	7.1
食事つづきのけ	はしが使えない	3	2.8	15	6.0	33	6.2	33	3.7	25	2.4	15	2.9
	姿勢が悪い	6	5.7	19	7.7	51	9.5	121	13.7	171	16.5	114	22.0
	ちらかし食べる	22	20.8	25	10.1	27	5.0	30	3.4	52	5.0	24	4.6
アレルギー	アレルギー	3	2.8	0	0	9	1.7	10	1.1	21	2.0	9	1.7
合 計		106	100.0	248	100.0	535	100.0	882	100.0	1,030	100.0	519	100.0

図2 年齢別訴えのあった食行動



3歳2.6, 4歳2.2, 5歳2.4で, 6歳2.1である。3歳の訴え数が最も多く, 次に5歳・4歳・6歳・2歳の順に少なくなっている。

訴え数の最高は7つで, 対象幼児の0.2%に

表3 年齢別訴えのあった食行動数 (%)

訴えの数	年齢(歳)					
	1	2	3	4	5	6
0	32.8	21.0	23.5	28.0	27.1	34.2
1	30.4	29.7	18.2	24.2	20.1	26.4
2	21.5	21.0	20.0	25.8	24.6	19.0
3	12.7	10.2	20.0	12.5	14.1	12.9
4	0.0	14.5	11.2	6.3	9.0	4.7
5	0.0	2.2	5.3	2.7	3.4	1.7
6	1.3	1.4	1.4	0.5	1.2	1.1
7	1.3	0.0	0.4	0.0	0.5	0.0

みられる。また, 訴えの全くないものは, 1歳32.8%, 2歳21.0%, 3歳23.5%, 4歳28.0%, 5歳27.1%, 6歳34.2%で年齢の高い子どもにも多い。

#### 4. 食行動と養育態度

母親の養育態度については、表4に示した10項目の回答を点数化し、養育点数とした。養育点数を高い群(10～5点)と低い群(3点以下)に分け、訴えのあった食行動との関係を検討した。

表4 子供に対する母親の意識と態度の評価

望ましい	+1
普通	0
望ましくない	-1

1. 世話をするのがめんどろ
2. 世話をするのが好き
3. 相手をして遊ぶ
4. よく抱く、ほほずりする
5. かわいいと思う
6. 食物の好き嫌いへの対応
7. ほしがるものは与える
8. 他の子と比べる
9. 近所との付き合いがよい
10. よその子を家に入れる

年齢別に訴えのあった食行動項目と養育点数との関係を表5に示す。○印は養育点数の高い母親であり、×印は養育点数の低い母親である。

「咀嚼」に関する項目では、「噛めない」は1歳に、「飲み込めない」は1歳と5歳にみられ、養育点数の低い母親の訴えが多い。

「食事の偏り」に関する項目では、「偏食」は3歳と4歳、「菓子ばかり食べる」は2歳と4歳にみられ、年少児の場合は養育点数の低い母親にその訴えが多く、年長児は養育点数の高い母親からの訴えが多い。「買い食い」は4歳に、「食欲がない」は3歳にみられるが、養育点数の高い母親の訴えが多い。

「食べ方」に関する項目では、「食べ方が早い」は2歳・3歳・5歳にみられ、いずれの年齢も養育点数の低い母親の多くが訴えている。「食べ方が遅い」は4歳にみられ、養育点数の高い母親に訴えが多い。

「食事量」に関する項目では、「過食」は2歳・4歳・5歳・6歳にみられ、2歳と6歳は養育点数の低い母親が、4歳と5歳は養育点数の高い母親の訴えが多い。「少食」についての

表5 年齢別食行動と養育点数

区分	項目	年齢					
		1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
咀嚼	噛めない	×					
	飲み込めない	×				×	
食事の偏り	偏食			×	○		
	食欲がない			○			
	菓子ばかり食べる		×		○		
	買い食い				○		
食べ方	早い		×	×		×	
	遅い				○		
食事量	過食		×		○	○	×
	少食				○	○	
食事の状態	遊び食べ				○		
	食事中さわぐ		×				×
食し事つ	はしが使えない	×	×	×		×	
	姿勢が悪い		×		○		
	ちらかし食べ			×		×	×
アレルギー	アレルギー				×		

○ 養育点数が高い × 養育点数が低い

訴えは、4歳・5歳の養育点数の高い母親に多い。

「食事の状態」に関する項目では、「遊び食べ」は4歳にみられ養育点数の低い母親の訴えが多い。「食事中にさわぐ」は2歳と6歳にみられ、養育点数の低い母親が多い。

「食事のしつけ」に関する項目では、「はしが使えない」は1～3歳と5歳、「ちらかし食べ」は2歳・5歳・6歳にみられ、いずれも養育点数の低い母親の訴えが多い。「姿勢が悪い」は養育点数の高い母親と低い母親ともに訴えがみられている。

年齢別に訴えのあった項目と母親の養育点数の関係を見ると、1歳・2歳・6歳ですべて養育点数の低い母親からの訴えである。4歳の場合は、養育点数の高い母親の訴えである。3歳と5歳では、養育点数の高い母親と養育点数の低い母親ともに訴えている。

以上の結果から、食行動と養育態度の関係について明らかになった点をまとめると次のとおりである。

- ① 4歳児は、他の年齢に比べて訴えの食行動項目が多くみられる。
- ② 母親の対応が影響する「咀嚼」と「食事のしつけ」に関する項目は、養育点数の低い母親に訴えが多くみられる。
- ③ 母親の要求の大きい「食事量」と「食事の偏り」に関する項目は、養育点数の高い母親にその訴えが多い。

#### まとめ

##### 1. 乳幼児の母親から訴えのあった食行動

本調査の結果、母親から訴えのあった食行動項目は4歳児に多くみられている。食行動のなかでも、“遊び食べ”や“買い食い”など2歳・3歳ではみられない積極的な行動項目に母親の訴えが多く、それらの行動は5歳・6歳になると減少している。

以上のことから、乳幼児の食行動を成長・発達の過程として捉えてみると、子ども自身活発な摂食行動ができるようになるのは4歳頃であり、その時期に母親の訴えも多くなってくるのがわかった。

##### 2. 食行動と養育態度との関係

乳幼児に出現する食行動について母親が問題として訴える場合、母親の子どもに対する期待、観方、母子関係が大きく関わっている。行動問題の調査によると、3～5歳の行動問題は大人の観方の違いによるものであって、正常の範囲に属することが多いとしている。<sup>4)</sup>

本調査では、養育点数の低い母親の場合、“食事中さわぐ”“姿勢が悪い”など食事の状態や“噛めない”“飲み込めない”など咀嚼に関する項目、そして“はしが使えない”のしつけの項目などは、年少・年長を問わず訴えが多くなっている。

食事のし方については、年齢の低い子どもの場合、食事の初めから終わりまで、静かに、こ

ばさず食べることはまだできない<sup>5)</sup>。また、はしについては、「はしが使えぬ」は3歳、「正しく持つ」は3歳後半であり、それらが習慣となるのは5歳頃といわれているが本調査では“はしを使う”は1歳からの訴えの項目となっている。

以上のことから、本調査で母親から訴えのあった“はしが使えない”“噛めない”“飲み込めない”などの摂食機能の発達は、母親が成長・発達段階を考慮した援助と子どもの能力が発揮されるような実践によって、順次自立を促すことが大切であると考えられる。

今後、養育点数の低い母親については、子どもへの対応や配慮などを個別に追跡し、乳幼児の摂食行動の発達を阻む「問題となる食行動」の発生要因を捉える必要があると考えている。

#### 参考文献

- 1) 八倉巻ら：乳幼児の食行動に影響を及ぼす養育条件に関する研究  
厚生省心身障害研究63年度研究報告書  
211-231
- 2) 二木武他：小児の発達栄養行動  
医歯薬出版
- 3) 村上多恵子：摂食に問題のある保育園児の背景要因 小児保健研究49 55-62 1990
- 4) 石井哲夫：子どもの発達過程と行動問題  
母子保健情報 第12号 11-13 1986
- 5) A・ゲゼル：乳幼児の発達と指導  
家政教育社 1983
- 6) 津守真他：乳幼児精神診断法  
大日本図書 1982
- 7) 西本 望：乳幼児の基本的生活習慣に関する研究 日本保育学会第41回大会研究論文集 762-763 1989
- 8) 津田理子：3歳児の食生活（第3報）  
第31回日本小児保健学会講演集 89-90  
1984
- 9) 馬場一雄監修：小児生理学 へるす出版  
195 1983

## Abstract

Studies concerning Upbringing Conditions of Children  
as seen from Eating Behaviors

Kazuko Yaguramaki, Sachio Ohba, Teruko Murata,  
Kayo Morioka, Setsuko Ohmori, Kiyoko Mizuno,  
Masahiro Takaishi

During 1989 eating behaviors of children reported from their mothers were examined after classifying them by the sex and by the age. Furthermore, their relation with the up upbringing attitude of the mothers was studied.

In the items classified by the sex, food inclination and eating discipline were found in the report of boys, whereas in the report of girls, the volume of foods was mostly concerned.

As classified by the age, chewing and eating behaviors showed a higher concern in the report of younger children, while in the report of older children, food inclination and eating discipline occupied a higher percentage.

Thus, it was observed that in eating behaviors reported from mothers, differences by the sex and age have been noted.

When the correlation between eating behaviors and mothers' upbringing attitude was examined, the items concerning chewing and eating discipline were found more in mothers whose upbringing points were low, whereas the items concerning the volume of foods and food inclination showed correlation in mothers whose upbringing points were high.

Consequently, wise responses of mothers who consider the growth and development stages of children are required for the progress of eating behaviors of children. Henceforth, the authors will trace each case and clarify one by one.



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:平成元年度は,母親から訴えのあった食行動を性別・年齢別に検討し,さらに母親の養育態度との関係について考究した。性別に訴えのあった項目をみると,男児では「食事の偏り」「食事のしつけ」に関する項目であり,女児では「食事の量」に関する項目であった。年齢別では,年少児は「咀嚼」「食事の状態」であり,年長児は「食事の偏り」「食事のしつけ」の訴えが多く,母親が訴えた食行動に性別・年齢別の相違がみられた。食行動と養育態度との関係についてみると,「咀嚼・食事のしつけ」に関わる項目では養育点数の低い母親に「食事量・食事の偏り」に関わる項目では養育点数の高い母親に関係がみられた。子どもの食行動の発達については,子どもの成長・発達段階を考慮した母親の対応が必要とされる。今後,個別に追跡し,それらを明らかにしたいと考えている。